

第 10 回 ビゼーとオペラ「カルメン」②



カルメン



ドン・ホセ



エスカミーリョ



ミカエラ

さて、いよいよビゼー作曲 オペラ「カルメン」についてひも解いていくことにいたしましょう。

主な登場人物は上の 4 人です。この 4 人にそれぞれの気持ちを語ってもらいながら進めてまいります。

1 原作とオペラの違い

原作者のプロスペル・メリメは、1803 年にパリで生まれオペラ「カルメン」が初演される 5 年前の 1870 年に 67 歳で亡くなっている。1845 年に出版された小説「カルメン」は当時あまり話題にならなかったが、彼の最大の功績は、自由奔放な生き方を信条とするジプシー（ロマ）女カルメンをつくりあげたことであろう。



小説「カルメン」では、あまりパツとしなかった私が、今やオペラで世界中の殿方を虜にしているなんて、わからないものね。メリメは、小説の中で私のことをどんなふうを描いたのかしら？

メリメの描いたカルメン

「肌は、もっとも完全に滑らかではあったが、銅色に極めて近かった。目は斜視だが、切れが長く、パッチリした好い目である。唇は少々厚いが形は端正で、皮をむいた巴旦杏（はたんきょう＝スモモ）の実よりも白い歯並びを時々チラリと見せていた。髪の毛は、恐らく少々太すぎたであろうが、鳥の羽のように青光りする光沢を放って丈長に艶々と光っている。」

（杉 捷夫氏訳）

俺はカルメンを一目見て、この女とは関わらないほうがいいと感じたんだ。だからカルメンがいくら挑発してきてもはじめは無視し続けた。

でも、でも、でも！

あの女の野生美あふれる妖しい美しさが、どうしても頭から離れなかった。離れなかったんだ！

ミカエラという許嫁がいながら、俺はなんということをしてしまったんだ。ああ、ミカエラ、ミカエラ、許してくれ！！



私もあなたのお母様もあなたの帰りをずっと待っています。たとえあなたがあの女に惹かれてもそれは一時の気の迷い。

そうよねホセ！いつまでもあなたを愛しています。



メリメの書いた原作の物語

(物語は、「わたし」という人物が語る形で進められる。)

わたしは、ある山の中の木賃宿でドン・ホセに会う。その時ホセは懸賞金まで懸けられている凶悪犯だった。次に再会した時、彼は愛するカルメンを殺して自首し、獄中で絞首台に上る日を待っていた。そこでホセの悲しい恋物語が彼の口から語られるのである。

オペラの「カルメン」は、登場人物や話の筋が原作とはだいぶ違っている。台本を書いたアルヴィとメイヤックの2人は、カルメンだけを原作通りとし、ホセをアンダルシア随一の大悪党から純情な密輸入者に変えたり、原作ではそれほど目立たない闘牛士のルーカスをホセとカルメンを張り合うライバル「エスカミーリョ」として派手な存在に仕立てたりした。また、原作にはないホセの婚約者「ミカエラ」を登場させたことは、台本作家たちの大きな功績で、血なまぐさいこのオペラの中で、一服の清涼剤になっている。

「血と砂」の国のスーパースターである私を、よくぞカッコいい存在にしてくれた！
台本作家とビゼーに心から感謝する。
私の魅力にカルメンがまいてしまうのは当然の成り行きだ。ホセは、そもそもカルメンとつり合う男ではなかった。さっさと国に帰っていれば良かったものを。バカな男だ！



2 オペラ「カルメン」の初演とその後

オペラ「カルメン」の初演

1874年に全曲スコアが完成し、その年の10月からオペラ＝コミック座で稽古が開始されたが、劇場のオーケストラや合唱団が演奏不能を訴えて抵抗し、稽古がなかなか進まなかった。

結局、初演の幕が開いたのは、翌1875年3月3日であった。初演には、マスネ、サン＝サーンス、グノーなど音楽界の重鎮が詰めかけた。

初演は4時間半にも及び、最終幕が開幕したのは、ようやく真夜中を過ぎてからのことだったらしい。

台本作家の一人アルヴィが、「終わりに近づくほど冷たくなり、第4幕は、最初から最後まで冷たく迎えられた」と書いたように、聴衆の態度はひどく冷たかったといわれている。しかし、血なまぐさい物語に聴いたことのないスペインの音楽など、聴衆がこのオペラを理解するには、しばらくの時間が必要だったのである。

この結果を受け、ビゼーの落胆は大きく、同じ年の6月に天に召されることになるのである。

オペラ「カルメン」のその後

オペラ「カルメン」によって、フランス・オペラに新しい道が開かれた。このオペラを観たチャイコフスキーは、「このオペラは、必ずや全世界を征服するであろう」と予言したが、正にその予言通りとなった。

オペラ「カルメン」について、ご理解いただけ
たでしょうか？今日もどこかの国の劇場で、歌手たちが
私たちを演じています。オペラ「カルメン」は永遠に
不滅です！

それでは、6月6日に栃木県オペラ協会の舞台で
お会いしましょう。必ずや皆さんを感動の世界に
連れて行ってくれるはずです。お待ちしております。



文責 S.0

参考文献

- ・ 志島栄八郎 著 「クラシック名曲ものがたり集成」 講談社 α 文庫
- ・ [ジョルジュ・ビゼー - Wikipedia](#)
- ・ [カルメン \(オペラ\) - Wikipedia](#)